

少年の主張

わたし色で輝け

小牧市立小牧中学校 3年

自分の事が嫌い…。伝えたい言葉があるのに伝えられず、すぐに飲み込んでしまう。誰かの意見に耳を傾けてばかりで、自分の意見を堂々と言うことができない。自分に自信を持ってないからだ。人の顔色ばかりを伺って、自己主張ができない自分が、情けなくて格好悪くて大嫌いだ。そんな十二歳だった頃の私。

春になり、中学校に入学した。そして憧れだった吹奏楽部に入部した。小学生の頃に、先輩たちの演奏を聴き、感動して、キラキラと輝く姿に目を奪われた。自分もその一員になりたいと思っていた。もしかしたら自分も先輩たちのように輝けるのではないかと、思って…。入部して間もなく、自分がやりたい楽器を選ぶことになった。私はみんなから人気がなかったチューバを選ぶことにした。チューバは一番大きい金管楽器で、とても重く、メロディを奏でる事はほとんどないからあまり目立たない。チューバを選べばライバルがいないから、という情けない理由だけでこの楽器を選んだのだ。

チューバを担当する事が決まり、チューバを演奏している先輩からいろいろと教わる事になった。先輩はとてもわかりやすく丁寧にいつも笑顔で私に指導してくださった。先輩がチューバを演奏する姿は、とても格好よく輝いてみえた。そのチューバの音色は、音楽をどっしり支え、深みを与えていた。先輩はチューバを担当している事に誇らしい感じだった。そんな先輩の姿を見ているうちに、私は自信のなさからチューバを選んでしまった自分がとても情けなく思えてきた。だけどそれと同時に別の気持ちが込み上げてきた。私も先輩のように真っすぐな心で楽器と向き合いたい。先輩のように誇らしく楽器を演奏したい。それから私は練習する事がとても楽しくなった。先輩のご指導のおかげもあり、少しずつしっかりと音が出せるようになってきた。演奏する自分の事も好きになった。

先輩の姿を見ていてわかったのは、輝いている人は、前を向いている人で、努力をしている人だということだ。自分に自信が持てないからといって何事にも卑屈で消極的だった私は、その後ろ向きな考え方のせいでくすんでしまっていた。誰のせいでもない、自分自身の問題だった。くよくよしている暇なんてない、私も自分らしく輝いてみたい。

それから私は部活動だけではなく、いろいろな事に取り組もうと思うようになった。クラスの室長や地域のボランティアに積極的に挑戦した。とても勇気が必要だった。時には勇気を振り絞って挑戦したが、上手くいかない事もあった。そういう時はとても落ち込んでしまう。また自分を嫌いになってしまいそうになる。やっぱり私は自分が嫌…。そんな時、落ち込む私を見た友人がそっと声をかけてくれた。先生が私の努力に気付いて認めてくれた。私は一人ではない。私はダメな人間ではない。私を見てくれている人はちゃんといて、私が頑張れば、それに気付いてくれる人がいる。私は一歩踏み出す事で、自分がどれだけたくさんの人に支えられているのか、自分のことを想ってくれているのかを知る事ができた。

吹奏楽の演奏にはたくさんの楽器が使われている。高い音を出す楽器、低い音を出す楽器、リズムを奏でる楽器…。いろいろな楽器があるように、世の中にもいろいろな人がいて、それぞれに個性を發揮しながら輝いているのだと思う。私が演奏するチューバは決して目立たないけれど、重低音が全体を支えている。そんなチューバが私は好きだ。私もチューバのようにどっしりとみんなを支えられる人になりたい。私は私を支えてくれる周囲の人たちが大切だ。同じように、自分自身の事も大切だ。「自分が嫌い」な自分はもういない。私は私のままでいい。私は私らしく、いつか必ず輝く。そして今はまだ、その途中。